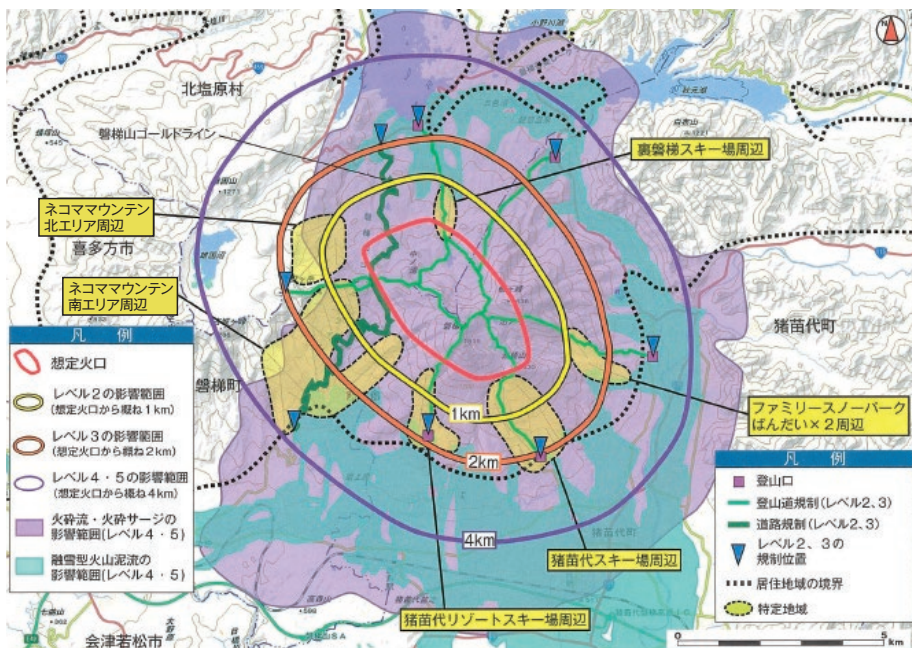


# 磐梯山の噴火警戒レベル

## 規制範囲と噴火警戒レベル

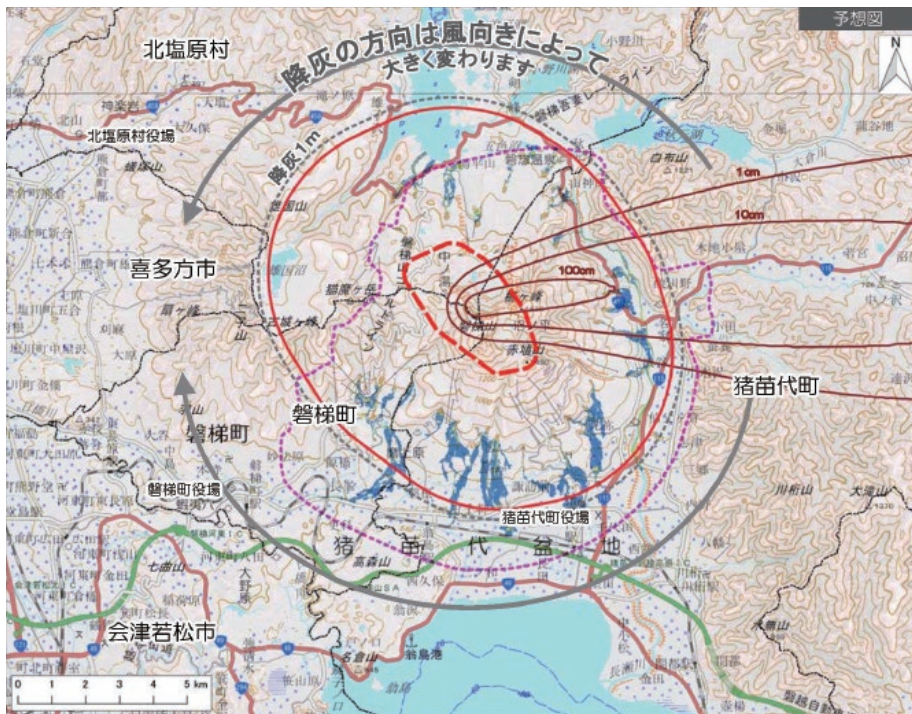
[規制範囲]



[噴火警戒レベル]

レベル5 (避難) ※影響範囲は ○ 内	危険な居住地域からの避難等。
レベル4 (避難準備) ※影響範囲は ○ 内	警戒が必要な居住地域での避難準備等が必要。要配慮者及び特定地域の避難等が必要。
レベル3 (入山規制) ※影響範囲は ○ 内	登山禁止・入山規制など危険な地域への立入規制等。状況に応じて特定地域への避難、要配慮者の避難準備等が必要。
レベル2 (火口周辺規制) ※影響範囲は ○ 内	火口周辺への立入規制等。状況に応じて特定地域の避難等が必要。
レベル1 (活火山であることに留意)	状況に応じて火口内への立入規制、特定地域の避難準備等が必要。

[水蒸気噴火ハザードマップ] (マグマ噴火に比べ発生頻度は多い)



磐梯山の過去の噴火の特徴から、3つの噴火形態を設定しました。各噴火形態の発生頻度、噴火規模、発生する現象は次の通りです。

噴火形態	小規模水蒸気噴火	水蒸気噴火	マグマ噴火
噴火形態			
発生頻度	過去1万年以内に多数発生	過去1万年以内に8回発生	過去1万年以内に1回発生
想定規模	100m <sup>3</sup> (御嶽山2014年噴火と同程度)	3000万m <sup>3</sup> (磐梯山1888年噴火と同程度)	3000万m <sup>3</sup> (磐梯山1888年噴火と同程度)
発生現象	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな噴石</li> <li>降灰・小さな噴石</li> <li>降灰後の土石流</li> <li>火口噴出型泥流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな噴石</li> <li>降灰・小さな噴石</li> <li>火砕サージ</li> <li>降灰後の土石流</li> <li>火口噴出型泥流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな噴石</li> <li>降灰・小さな噴石</li> <li>火砕サージ</li> <li>融雪型火山泥流 (冬季限定)</li> <li>降灰後の土石流</li> <li>火口噴出型泥流</li> </ul>

## 火山災害から身を守るために

活火山は福島県には5つあり、その中の3つ(磐梯山・吾妻山・安達太良山)が常時観測火山で、気象庁は24時間体制で監視観測をしています。

しかし、ここ100年間では、この3つの活火山で噴火をしているのは、吾妻山の1950年と1977年の2回だけで、どちらも小規模で人的被害は発生していません。

そのため、福島県民の火山に対する防災意識は低いのが現状です。

そこで、火山に対する理解を深めることが、次の噴火の備えとして重要です。

まず、磐梯山の火山防災マップを学ぶことから始めましょう。

### ① 火口の場合

磐梯山では、過去1万年間で北は銅沼周辺から南は赤埴山周辺まで様々な場所から噴火をしています。想定火口範囲という図が示されていますので、どこから噴火が発生するかを事前に知っておいてください。

### ② 噴火の形態・発生頻度

噴火の形態には3種類があり、a. 小規模な水蒸気噴火とb. 水蒸気噴火とc. マグマ噴火です。aは過去1万年間で多数発生し、bは過去1万年間で8回発生、cは過去1万年で1回発生。つまり、規模の大きな噴火はめったに発生しませんが、発生すると甚大な被害につながります。水蒸気噴火に比べて、マグマ噴火は高温のため、冬に発生すると大量の雪を解かず融雪泥流となり、より広範囲に被害が及びます。

### ③ 1888年の噴火

この噴火は、水蒸気噴火が引き金となり、小磐梯が山体崩壊をし、岩なだれとなり麓を襲い、477人が犠牲となりました。しかし、この岩なだれは数千年から1万年に1回程度発生する現象です。ですから、次の噴火は岩なだれの可能性は低いです。